

第一章 塀を塗る

「トム！ トム！」

返事はありませんでした。

「あの子はどこにいるんだろう？」とポリーおばさんは、あちこちを見ながら言いました。

ポリーおばさんはベッドの下を見ましたが、彼女はネコしか見つけられませんでした。

「トムや！ お前はどこにいるんだい」と、ポリーおばさんは大きな声で叫びました。

ポリーおばさんはドアを開けて、庭をのぞきました。

とその時、ポリーおばさんは自分の背後に物音を聞きました。

小さな少年が走って通り過ぎましたが、ポリーおばさんはその少年を手で止めました。

「何をしているんだい、トム？」とポリーおばさんは尋ねました。

「別に何も」とトムは、足元を見ながら答えました。

「何もだって！」とポリーおばさんは叫びました。

「自分の手や口を見てごらんよ。ジャムを食べるなど何度も言っただろうに」

「ああ、ポリーおばさん、自分の後ろを見て！」とトムは言いました。

その年老いた女性を見ると、トムは逃げ去りました。

ポリーおばさんは驚いて、それから彼女は笑いました。

「私ったら、ちっとも学びやしない」と、ポリーおばさんは心の中で考えました。

「トムはいつも私にいたずらをするけど、私は決して学びやしない。トムは毎日、新しいいたずらをするんだもの。私はトムが大好きだけど、トムの面倒を見るのは簡単じゃない。かわいそうなトム、あの子は私の妹の子供で、妹は亡くなっている」

ポリーおばさんは少しの間立ち止まって、それからこう続けました。

「まあ、明日は土曜日で学校がないから、トムは働かなくちゃいけないね。トムは働くのが嫌いだけど、トムはそれをするのを学ばなくちゃいけない」

トムは、ポリーおばさんや弟のシッドと一緒に、ミズーリ州にあるミシシッピ川沿いのセント・ピーターズバーグという村で暮らしていました。

その夏の晩は長く、トムは村を歩き回るのが好きでした。

ある晩、トムは自分の目の前に大きな少年を見ました。

トムはその少年のことを知りませんでした。このことがトムをびっくりさせました、というのもトムは新しい人をあまり見かけなかったからです。

この少年はとてもすてきな、高価な服を着ていました。

「彼は靴を履いているし、新しいシャツやネクタイを身に着けている。そして、今日は日曜日じゃない」とトムは考えました。

「僕の服は古びていて不格好だし、僕は靴を全く履いていない」

トムが少年を見ると、その大きな少年はトムを見ました。

トムは彼のことが好きではなかった。で、「僕は君と戦えるし、僕が勝つき！」と言いました。

「本当に？」とその少年が言いました。

「やってみたら？」

「ああ、僕にはできるよ」と、トムはその少年を見ながら言いました。

「いいや、君にはできない」とその少年は怒りながら言いました。
「いいや、僕にはできる」とトムは大きな声で叫びました。
沈黙がありました。
「君は僕のことを怖がっているんだ」とその少年は言いました。
「いいや、僕は君を怖がってなんかいないよ」とトムは言いました。
「いいや、君は怖がっているね」
「いいや、僕は怖がっていない」
少しの間、沈黙がありました。
それから、トムがその少年を押すと、その少年はトムを押しました。
間もなくすると、彼らは地面の上で取っ組み合っていました。
トムはその少年の髪の毛を引っ張って、彼を強くぶちました。
彼らは二人とも、激しく戦いました。
それから、その大きな少年が叫び始めました。
「やめろ！」と彼は叫びました。
「やめてくれ！」
「さあ、思い知ったか」とトムは言って、歩き去りました。
トムは夜遅くに家に帰りましたが、トムの服は汚れていました。
ポリーおばさんはトムを見たとき、「私はこの少年に何ができるだろう？ まあいいわ、明日は土曜日だし、トムにはするべき仕事があるわ」と思いました。
土曜日の朝は美しく、晴れていました。
それは夏のことで、世界は幸福でした。
トムは長くて汚れた塀の前に座って、塀を見ました。
塀は30メートルくらいの長さで、3メートルくらいの高さでした。
トムはとても不満でした。
「今日は土曜日で、僕はこの長い塀を塗らなくちゃいけないんだ」とトムは考えました。
「僕の友達みんな、僕を笑うだろうな。とても長い1日になるだろう」
トムは長いブラシを白いペンキに入れて、塗り始めました。
トムは立ち止まり、自分の仕事を不満そうに眺め、それから塗り続けました。
数分後、トムは賢い考えを思い付きました。
トムは通りに、友達の本・ロジャースを見ました。
本は手に大きな赤いリングを持っており、塀を見にやって来ました。
「お前、ポリーおばさんのために働いているんだな」と本は笑いながら言いました。
トムは何も言わず、塗り続けました。
「俺は泳ぎに行くつもりなんだけど、お前は俺と一緒に来られないな」と本は言いました。
「お前は仕事してるんだもんな」
「君はこれを仕事と呼ぶのかい？」とトムは尋ねました。
「もちろん、それは仕事だよ。お前は塀を塗っているじゃないか」と本は言いました。
「たぶんこれは仕事だけど、ひょっとするとそうじゃないかもな。僕はこれが好きなんだ！」とトムは満足そうに言いました。
「僕は毎日泳ぎに行けるけど、塀を塗ることは毎日にはできないのさ」

ベンは、トムがゆっくりと注意深く塗っている間、トムをじっと見ていました。トムはしばしば立ち止まって、塀から後ろに下がりました。トムは自分の仕事を眺めて、ほほ笑みました。ベンは不意に塀に興味を持って、「俺も少し塗ってもいいかな、トム？」と言いました。

トムは少しの間考えてから、「ごめんな、ベン。ポリーおばさんが僕にこれをしてほしがっているんだよ、だって僕は塗るのがとてもうまいからさ。僕の弟のシッドもこれをしたがったんだけど、彼は塗るのがうまくないんだ」

「ああ、お願いだよ、トム」とベンは言いました。

「お願いだからさ、俺に塗らせておくれよ！ 俺だって塗るのがすごくうまいんだぜ。ほら、俺のリンゴをいくらかお前にやるからさ」

「いや、ベン、できないよ…」とトムは言いました。

「じゃあ、俺のリンゴを全部持って行っていいから」とベンは言いました。トムはうれしくなりましたが、ほほ笑みませんでした。

トムはベンにブラシを渡して、リンゴを食べるために座りました。トムの他の友達が、そばを通りかかりました。

最初、彼らはトムを笑いましたが、すぐに彼らは皆、塀を塗りたがりました。ビリー・フィッシャーはトムに凧を渡し、ジョニー・ミラーはトムに死んだネズミを持ってきました。

他の友達は、トムに古びたナイフや片目のネコ、古びた青い瓶、古びた鍵やその他の面白い物を渡しました。

トムの友達が塀を塗り、トムは今やたくさんの面白い物を持っていました。トムはこれらの新しい物を手に入れて、家に帰りました。

「ポリーおばさん、もう行って遊んでもいい？」とトムは尋ねました。ポリーおばさんはきれいな白い塀を見たとき、とても喜びました。ポリーおばさんは、トムに大きなリンゴをあげて言いました。

「いい仕事をしたわね！ 行って遊びなさい、でも夕飯に遅れちゃだめよ！」